

**一人ひとりの学びの充実をめざして
～ ひとり学習を全体学習の場面へ ～****1. 研究テーマ設定の理由****(1) 学校提案とかかわって**

社会科の学習内容は、主として現代社会の事象を取り上げるため、より具体的・直接的に現実社会とかかわり合う教科である。社会の仕組みを学習するとは、事象を単に知識として獲得するだけではなく、「ひと・もの・こと」という具体的な対象とかかわらせる中で認識され、それを追究していく過程を通して深化していくものであると考える。子どもたちは、その「もの」や「こと」を通して社会に生きる人の生き様に触れ、思いや願いを知り、社会の一員として成長していくと考える。

子どもたちが学びをすすめていくとき、自分の学習を深化させ多くの成果を手にするためには、まず自分の意思で主体的に学んでいこうとすることが大切である。また、学習の中で、一人ひとりの子どもに寄り添いながら、学習意欲やそれぞれの問題意識を高めていく指導姿勢が重要となる。例えば、「クラスの子どもたちは、今どんなことに興味・関心をもち、何を追究しようとしているのか」とか「この子はこの問題をどうとらえ、どのように対象に向き合うだろうか」という視点が必要となってくる。子どもたちはその追究の過程を通じて、新たな知識・理解を獲得し、深め、よりよく問題を解決する方法や能力を身につけていくのである。この場合において指導者は、学習意欲を刺激し方向づけ、学習活動を支援する存在でなければならない。子どもたちが自ら追究する中で獲得していった知識は、単に知識の増加に留まらず、その知識を獲得するための道筋や学び方をも体得するはずである。

このように個々の学びを深めさせながら、学習経過や学習成果を交換・交流させることで、より協同的な学びをすすめながら対話をいっそう深めたいと考えている。また、子どもの考えや姿をみとり支援していくことは、行き詰まっている子どもにも自信をもって学習に取り組みさせることにもつながるのである。

(2) 社会科でめざす子ども像

社会科の究極的な目標は、社会生活を営んでいくために必要とされる「公民的資質の基礎を養う」ことである。一人の人間として社会に対してどうかかわり、社会生活の中で自分はどう生きていくかを考え、社会の中で望ましい行動がとれるようにすることである。これは子どもたちに自分なりの「社会的なものの見方や考え方」を育てることと関連している。したがって社会科学習では、「社会的なものの見方や考え方」を身につけるようにするために、社会的事象に主体的にかかわらせていくことが大切である。

そこで、「社会科教育を通して実現すべき子ども像」を、次のように設定した。

A：事実を的確にとらえ、こだわりをもちながら学習をすすめていける子**B：社会的事象への公正な判断力をもち、未来への生き方につなげられる子**

Aの「事実を的確にとらえ」とは、事実に基づいて見たり考えたりすることである。様々な社会的事象から具体的な事実を的確に読み取ることが大切である。子どもがもっている社会的事象に対する見方や考え方は多様であり、それは、既習内容の理解や生活体験の差異に由来する。「こだわりをもちながら学習をすすめる」とは、社会的事象に対して疑問を抱くことも含め、自分なりに解釈（意味づけ）して考察することである。新たな社会的事象と出会ったときに、他者の考えと自分の考えを比較したり、共感したりする場を全体学習ととらえている。全体学習の中で、子ども一人ひとりが友達とかかわりながら、自分の思いやこだわりをもって学習をすすめることにより、社会的事象をより総合的に把握したり考察したりすることができる。と考える。

Bの「社会的事象への公正な判断力をもち」とは、社会的事象を一面的に調べ理解することとどまらず、多角的・多面的にとらえることで、事象や課題を公正かつ総合的に判断する力を育むことである。社会的事象の多くは、立場を変えて見れば当然異なる見解が生じるものであり、多角的・多面的にとらえることで、より広い視野から考察・判断でき、子どもの中に個性的な見方や考え方が育っていく。また、自分の見方や考え方を表現し合い友達と比較・交流することによって、より公正かつ総合的なものの見方ができるようになるに違いない。また、「未来への生き方につなげられる子」とは、自分が生活している社会に深い関心や愛着をもち、それをもとに自分なりの未来の社会像や生き方を描き出すことである。社会的事象を自分の生活や自分自身とかかわりの中で見たり考えたりすることで、自分の考えや夢をより広げ、自分なりの生き方や生活の改善につなげていけるのである。そして、“自分にとっては”“自分ならば”など、

自分を社会とのかかわりの中で見つめ直し、未来への生き方につなげていくことができる子に育てて欲しいと願っている。

2. 社会科学習における「学びの質の高まり」

社会科学習の具体的なねらいは、子ども一人ひとりが自ら問題意識をもって意欲的に学ぶ態度をはじめ、自分なりに思考し判断しながら問題を解決する力や自分の言葉で表現する力、学習の成果を自らの生活向上に生かす力などを身につけさせることである。社会的事象を単なる知識の部分だけで理解するだけでなく、社会的事象を多角的・多面的にとらえることで総合的に判断することが重要である。

このようなねらいを達成し、社会科学習を一層意義深いものにしていくために、全体学習と同様にひとり学習を大切にしたいと考えている。全体学習は考えをすり合わせ練り合う場であり、ひとり学習を発展させる場でもある。そこにおいて、全体学習はひとり学習のために、ひとり学習は全体学習のために相互に関連し合いながら位置づけられるのである。「その学習対象について、ぼくは〇〇だと思う。」「わたしは、〇〇についてこんな疑問をもっている。」というように、学習対象に対して個人の思いをしっかりとつことから、ひとり学習がスタートする。学習対象と出合い、子どもたちは様々な疑問をもちながら追究活動をすすめるが、このとき指導者は、誰がどんな事を調べ、どのように資料作りをしているのかを確実に把握しておくことが大切である。また、自分の疑問を解決できない子に対し、調べ方や方法をタイミングよく助言することも当然効果的である。ひとり学習をすすめ、その学習を深めることで、地図やグラフなどの具体的資料を効果的に活用し、地域社会の社会的事象の特色や関連などについて考える力、調べたことを自分なりに表現する力を伸長させることにもつながると考えている。

学級での全体学習で話し合いが始まると、いろいろな考えがでてくる。友だちの考えをしっかりと聴き、自らの思いを出し合う中で、「なるほど、そんな見方や考え方があるんだな。」と友だちの考えに共感することや、「ぼくと〇〇さんとは考えがちがうようだから、◇◇を用意して、もう一度ぼくの意見を言い直してみよう。」というように、学習対象に対する自分の考えを見つめなおすきっかけになり、新たなひとり学習の課題が設定されることが多い。このように子どもたちが“相互の刺激”をし合い、友だちの考えを知る中で自分の考えを一層深めることは、社会的事象や課題を公正かつ総合的に判断する力を育てる上でも大切である。また、友だちの知識や考えを比べたり・つなげたり・まとめたりすることで、知識と知識を再構成し、具体的な事実に対する理解が深まるのである。

3. 研究の展望

ひとり学習と全体学習を交互に取り入れる社会科学習を、より充実させるための重要なポイントとして次の3点が考えられる。今後の研究の視点としたい。

①学習単元の開発と充実、学習課題とのかかわり

子どもたちが興味・関心をもつような活動や調査見学を取り入れた単元計画が必要である。また、他の友だちとの学びの交流を考慮した学習課題が大切である。学習課題とは、子どもたちの問題意識からスタートし、“相互の刺激”をし合う中で深化、発展していくものである。学習課題と出合ったとき、子どもたちは様々な疑問をもちながら追究をはじめ、問題解決への追究の見通しがもてる適切な学習課題でなければならない。

②ひとり学習における学びの質の変容

学習課題と積極的にかかわっていくと、ひとり学習の問題意識が深まっていく。指導者は一人ひとりのみとりと支援が特に重要になってくる。ノートや作文、発言から個々の学びをみとり、子どもたちの変容を把握しながら学習を組み立てたいと考えている。個に応じた支援をすることで、子どもたちが調べてきた様々な考えをつなぎ、関連させながら全体学習をすすめることができる。

③対話型学習の構築

ひとり学習で調べてきたことや考えてきたことを全体学習で他者と対話させる中で、一人ひとりの学びの質を高めることができる。対話型学習では、ともに学び、考え合う場面を特に大切にしたいと考えている。対話型の授業を行うことで他者の学びに共感し、自分の思いや考えをより深めさせる。

4. 研究の評価

自分の思いや考え方の根拠となる資料等を、ひとり学習のみとるとともにその変容を把握する。様々な活動における学習プリントや作文等で、個々の学びをみとり評価する。全体学習では、話し合い活動を通して、対話の深まり方を探り、学びの質の高まりを評価する。また、子ども自身が学習を振り返る作文やプリントで、公正かつ総合的に判断する力が育っているかを評価する。